

岐阜県・世界遺産 白川郷の合掌造り集落

～地域特性と大家族制を反映～

日本不動産研究所 岐阜支所
不動産鑑定士 西村 隆

岐阜県白川郷合掌造り集落は平成7(95)年12月、富山県五箇山の合掌造り集落とともに世界遺産登録された。白川郷がある岐阜県大野郡白川村は県の北西部に位置し、富山県と連なり西は白山山系を経て石川県と境界、「飛山濃水」と語られるように山ひだが険しく、陸の孤島と呼ばれた地域であったが、東海北陸自動車道の全面開通による交通アクセスの向上等により、今では国内外から多くの観光客を集めている。

1.合掌造りとは

合掌造りは近世中期に始められた民家様式で、木材を梁の上に手のひらを合わせたように山形に組み合わせて建築された、急勾配な茅葺きの屋根を特徴とする茅葺家屋住居である。白川では「切妻合掌造り」といわれ、屋根の両端が本を開いて立てたような三角形になっており、積雪が多く雪質の重い白川の自然条件に適した構造といえる。白川に現存する合掌造り集落の大多数は江戸時代中期から末期に建てられたもので、風向きと日照量を考慮して南北に面して建てられている。また家ごとに塀がないことも特徴的であり、独特の景観を生み出している。

2.白川での人々の暮らし

深い山々に囲まれ、耕作地の少ない白川での現金収入の源となったのが養蚕業で、江戸時代から昭和初期に至るまで村人たちの基盤産業となっていた。屋根裏の大空間を2～4層に分けて蚕の飼育場として使用した。また上で述べたように切妻造りのため、妻の開口部で光と風を取り込み、より良い蚕の飼育環境を作り出すことができた。他には火薬の原料となる煙硝作りの場として床下が利用された。

このように耕作地が少なく、子供に分家させて土地を与えられない白川郷では、1軒に20～50人が生活する大家族制を取らざるを得なかった。この大家族制は、家長と長男のみに正式な結婚が認められ、次、三男以下兄弟や姉妹らは分家を許されなかったことから1軒での生活が多人数になったという。傍系の家族は他家の女性と内縁関係を結び、内縁の夫には扶養義務がなく子供は女性の家の家長が養育した。このように増大する家族数に対応するためには大きな構えの家が必要となった。

前述のとおり、屋根裏部屋では養蚕、床下では煙硝と居住部分は1階だけになるので、

合掌造りの大きな小屋組はこれらの産業に携わる大家族と使用人の居住場所として必要な構造といえる。

3.現在のメンテナンス

1階家屋部分の建築は加賀や越中からの大工職人の手により、屋根部分は村人たちの「結(ゆい)」と呼ばれる共同作業によるものである。梁や柱は1本の釘も使っておらず、1階囲炉裏からの煙によって、しっかりと結ばれている灌木や縄は燻し、乾燥されて硬度を生み、腐食も防いでいる。

茅葺き屋根の葺き替えは、40～50年に一度行われる。一軒の屋根の葺き替えには、4トントラック10台分ほどの茅と200人ほどの人手を要する。かつては多人数が1日で仕上げていたが近年は1日に人数を集めるのは難しいため、ボランティアの人々も参加する等、数日間で行う「現代結」と呼ばれる方法を取ることが多い。平成25('13)年8月には、結による3年ぶりの葺き替え作業が行われ3日間で計150人が携わった。

茅葺きの木造建築であることから火事に対する意識は高く、防火に備えた消防訓練も徹底して行われ、毎年秋には50基以上ある放水銃から一斉に放水を行う訓練が行われ、このほか年に何回も消防訓練が行われる。

4.これからの合掌造り集落

合掌造り家屋が減少する懸念がある一方、観光客の増大に伴い旅館、土産物屋といった非合掌造り家屋は増えており、「結」を維持することが困難になってきている。その結果が、前述のボランティアの参加となっているのも否めない。非合掌造り家屋である観光客目当ての建物は、白川郷のもの静かな山村集落といった景観イメージを損ねてしまう懸念もあり今後の課題となりそうだ。